

物語の舞台を訪ねて(3)

## 『ラスプーチン暗殺秘録』

- ユスポフ宮殿 (サンクト・ペテルブルク)

中間 ゆみ

今回取り上げる街は、北のベニスとも呼ばれる水の都、サンクト・ペテルブルク。ノンフィクションなので、物語の舞台であると同時に歴史の舞台でもある。

ビョートル大帝がペトロパブロフスク要塞に着工した1703年5月16日を創立の日とし、以後1918年まで、ロシアの首都であった街である。途中、1914年の8月よりペトログラード、1924年1月よりレニングラードと呼ばれた時期もあったが、ソビエト崩壊後はサンクト・ペテルブルクの呼び名に戻った。

サンクト・ペテルブルクの旧市街のモイカ運河沿いにユスポフ宮殿はあり、別名モイカ宮殿ともいう。この館の地下室で、帝政ロシア末期の怪僧ラスプーチンが暗殺されたのは有名な話である。

ラスプーチンに関しては、信用できるものとしてでないものをあわせてかなりの数の文献が出版されている。そのなかでも本書は、ラスプーチン暗殺の下手人のひとりであるフェリクス・ユスポフ公爵によって書かれたもので、一次資料として大変貴重なものであり、そのほかの著作物も本書に書かれた情報にかなりのところを負っているため、本書を抜きにしてラスプーチン研究は成り立たないとまでいわれている。

ロマノフ宮廷を意のままに操ったラスプーチンも、ついに1916年12月29日の夜にドミートリイ大公らによって暗殺され、ネヴァ河に捨てられた。検死の結果、肺に水が入っていたのが確認されたことから、川に投げ込まれた時にはまだ生きていたということになり、直接の死因は青酸カリ中毒でもなければ心臓近くを貫いた銃弾によるものでもなく、溺死であった。

ラスプーチンはツァールスコエ・セロに埋葬され、ドミートリイ大公とユスポフは流刑に処せられた。二ヵ月後にロシア革命が勃発し、ロマノフに連なる者はボリシェヴィキによって虐殺されることとなったが、流刑になっていたお陰で命拾いしたユスポフは、「暗殺に与した全員が事件についていっさいを口外しないという紳士協定を結んでいた」(ドミートリイ大公の姉のマーリヤ大公女の回想録より)にもかかわらず、亡命先のパリでこともあろうに暴露本を出版する。

“La fin de Raspoutine”のタイトルで1929年にパリのブロン書店より初版が出され、1982年にブリュッセルのコンプレクス書店から新版が出された。その10年後の1992年にヌイイのV & O書店から出された第3版の翻訳が本書である。



現在、モイカ宮殿の地下室は蠟人形を使ってラスプーチン暗殺の様子を再現しており、銀の十字架、マデイラワインなどそれらしく置いてあるが、ユスポフの本のとおり忠実に再現しているわけではない。事前連絡さえしておけば見学することができる。ただしロシア語かフランス語。

ちなみにラスプーチンの住んでいたゴローホヴァヤ通り64番地には築100年は超えていると思われるアパートがある。暗殺されただけに記念館になっているわけでもない、ただの老朽化したアパートがあるだけである。

『ラスプーチン暗殺秘録』

フェリクス・ユスポフ公爵 著 (青弓社)

『最後のロシア大公女マーリヤ』

マーリヤ大公女 著 (中央公論社)

なかま ゆみ (司書)